埼玉大学紀要 教育学部，69(2)：391－410 (2020)

ヨークシャー学校小説におけるジャンルの交差
――教育と娯楽の技法――

武田ちあき　　埼玉大学教育学部言語文化講座英語分野

キーワード：学校小説、ジャンル、道徳物語、紀行文学、テレビ番組

１．序

教員と視学官を経て作家となったジャーベイズ・フィン(Gervase Phinn, 1946-)の学校小説には、イギリス東北部ヨークシャーのデールズ（渓谷）地方を舞台とする 3 つのシリーズがある。まず『谷の裏側』(*The Other Side of the Dale*, 1998)以降の 5 部作、「デールズ」シリーズ。次に『小さな村の学校』(*The Little Village School*, 2011)以降の 5 冊、「小さな村の学校」シリーズ。そして『谷のてっぺんの学校』(*The School at the Top of the Dale*, 2018)で始まったばかりの「谷のてっぺん」シリーズである。

このうち、女性小学校長を主人公とする第 2 シリーズ、初任者を主人公とする第 3 シリーズが、いずれもオーソドックスな三人称の語りとスタンダードな筋運びで、田舎暮らしの村人の悠揚迫らざるペースを体現しているのに対し、視学官時代のフィン自身を主人公とする第 1 シリーズは、語り・文体・展開・構成が多彩な変化に富んでおり、ノンフィクションを謳っていながら、物語の提示の仕方においては、フィクションである第 2・第 3 シリーズよりも、よほど凝っている。

この「デールズ」シリーズの趣向として顕著なのは、ジャンルの横断である。学校小説の枠組に、道徳物語、紀行文学、テレビ番組などの他ジャンルが交差し、パロディにもパスティーシュにもなって、作品空間を活性化する。ジェイムソン(Fredric Jameson)は、キューブリック(Stanley Kubrick)やヒッチコック(Alfred Hitchcock)のメタ・ジャンル映画のジャンル・トリックが示す批評性・ポストモダン性を論じているが(82-127)、フィンのノンフィクションにも同様のことが言える。すなわち、物語の素材と形式の間には、その媒介者のイデオロギーと意図が介在するのであり、フィンの場合、ジャンルの交わりによって演出された馴染みやすさ・楽しさ・軽快さは、芸術的・教育的、さらには政治的な効果を企図している可能性がある。

本稿では、「デールズ」シリーズを、バニヤン(John Bunyan)の『天路歴程』(*The Pilgrim's Progress*, 1678, 1684)を代表とする道徳物語、コンラッド(Joseph Conrad)の『闇の奥』(“Heart of Darkness”, 1902)をめぐる紀行文学の言説、また種々のテレビ番組の形式との関連から分析し、こうした娯楽と文学の技法がフィンの作品にどんな文学的・教育的意義を発揮しているのかを明らかにしたい。

２．『天路歴程』のパロディとしての「デールズ」シリーズ――道徳物語と教育小説

2-1 受難の巡礼としての視学官

『天路歴程』は、信仰に目覚めた男、その名もクリスチャン(Christian)が「滅びの町(the City of Destruction)」を出発して「天の都(the Celestial City)」に至るまでの試練を描く寓意物語であり、英国民にとって聖書の次に大切な本、子どもたちが最初に読む本、と言われてきた英文学の古典

であるが、フィンの「デールズ」シリーズは、これを下敷きとした、いわば『谷路歴程』である。教育に目覚めた男、フィンが視学官としてヨークシャー州内の学校を巡回視察する道行きは、クリスチャンに負けないくらいの苦労の旅路。そこには「受難の巡礼」としての視学官のイメージが、幾重にも広がる。

第 1 巻の表題『谷の裏側』(*The Other Side of the Dale*, 以下 I)は、シリーズのオープニングのエピソード、初仕事で迷子になったフィンに村人の答える台詞、「おめえさんの行き先は、谷の裏っ側だべさ(“You want t’other side of t’Dale.”)」(I 3)の引用である。第 4 巻の表題『谷でうろうろ』(*Up and Down in the Dales*, 2004, 以下 IV)も、視学官 4 年目にして、いまだに「丘を上り、谷を下り(up hill and down dale)」(IV 112)、視察先の学校を探し回る迷走場面から採られている。第 2 巻『丘を越え谷を越え』(*Over Hill and Dale*, 2000, 以下 II)、第 3 巻『谷でてんやわんや』(*Head over Heels in the Dales*, 2002, 以下 III)、第 5 巻『谷の奥』(*The Heart of the Dales*, 2007, 以下 V)もまた然り。農業地帯の悪路、常識はずれに不規則な地名、人里離れた僻遠の地。この州ならではの困難からくる、行路の悪戦苦闘が作品の主調であることを、これらのタイトルは強く印象づける。

また、こうしたフレーズは『天路歴程』に登場する「困難の丘(the Hill Difficulty)」、「屈辱の谷(the Valley of Humiliation)」、「死の陰の谷(the Valley of the Shadow of Death)」、「誤りが丘(the Hill Error)」、「澄みが丘(the Hill Clear)」とも響き合う。回避できない順路を前にした旅人として、公務員の使命が宗教者の召命に重なり、任務の重要さに襟を正したくなる気持ちと、その一方で、殉教者並みの苦労かと笑いたくなる気持ちを、読者に同時に喚起する。

バニヤンの連想がフィンのテクストのユーモアをいっそう引き立てる、もうひとつの例は、路上に現れるさまざまな障害物である。田舎で行く手を阻む苦難とは、こちらが急いでいるときに、目の前を超低速で進む、ワゴン車やトラクターや牛の群れなのだ。

> It took me a good hour and a half to get to Hawthwaite. For several miles along a twisting narrow snake of a road, I was stuck behind a large caravan as it meandered and swayed at a leisurely pace. I became increasingly frustrated as the vehicle teetered along, the driver no doubt taking in the magnificent views across the panorama of rolling green dales and entirely oblivious of the driver behind him. When I finally managed to overtake, the driver and his passenger, both extremely elderly people, gave me a nonchalant wave and smiled happily. I sped past only to be slowed down again when a tractor pulled out of a field in front of me. He might have waited, I growled to myself: the English disease, pulling out in front of cars. I managed to get past eventually, only to come round a bend and find a herd of young bullocks blocking my path. The creatures filled the entire road, pushing and bumping each other, and lowing in complaint as the farmer and his collie dog chivvied them along. When the creatures turned into a field half a mile further on, the herdsman also gave me a casual wave and a cheery smile as I drove past. It was no wonder that I arrived in Hawthwaite in a ferment. (V 196)

（ホースウェイトに着くのに、ゆうに 1 時間半はかかった。数マイルにわたって、くねくねした狭い、蛇みたいな道を大型ワゴン車がのんびり、ふらふら、ゆらゆら行く後ろで、つっかえていたのだ。私はだんだんいらいらしてきた。この車ったら、よろよろ進みやがって、運転してるやつは

きっと、起伏なす緑の谷に広がる壮大な眺めをご堪能中で、後ろのドライバーにまるっきり気づいちゃいないんだ。やっとなんとか追い越したら、運転席も助手席も超・ご高齢の御仁で、あっけらかんと手を振ってよこし、幸せそうにニコニコしていた。私は急いで通り過ぎたが、またスピードを落とすはめになるだけだった。トラクターが畑から出てきて、前に割り込んだのだ。待っててくれてもよかっただろうによ、と私は心の中で怒鳴った。英国病だぜ、車の前に割り込むってのは。ようやくやり過ごせたと思ったら、今度は角を曲がったところで、子牛の群れが道をふさいでいた。こいつらときたら、道いっぱいに広がって押し合いへし合い、牛飼いとコリー犬に追い立てられて、モーモー文句をたれていた。それから半マイル行った先でこの家畜たちが向きを変えて牧場に入ると、走り去る私に、この牧夫も気さくに手を振り、上機嫌の笑顔を見せた。私がホースウェイトに着いた時には、かっかしていたのも無理はない。）

クリスチャンの行く手を阻んだ苦難の数々――背の重荷、泥沼、炎の吹き出す山、立ちふさがる猛獣・魔王・巨人――と照らすとき、フィンの眼前の風景が醸す牧歌的な幸福感はいやが上にも輝いて、フィンの焦りとの対比がさらなる笑いを呼ぶ。

そして、そのように田園を楽しむ余裕を持てないフィンの最大の受難は、この物語の設定されている 1980 年代、サッチャー政権の教育改革における効率主義・成果主義であることまでが、あぶり出されてくる。上記の引用でも、マイペースの相手を「英国病」呼ばわりして敵視するところには、当時の風潮にせかされる感覚が端的に出ている。バニヤンが『天路歴程』を世に問うた 17 世紀は英国史上、清教徒革命・王政復古・名誉革命と、宗教的に最も激動の時代であったのに対し、フィンが描くのは、英国の教育が前代未聞の危機に見舞われた時代であったことも、ここには浮かび上がってくるのである。

2-2 巡礼の地としての学校現場

フィンの遍路は、州民が「神のお膝元(God's Own Country)」と誇る風光明媚な国立公園地帯から、荒れ果てた工場町のスラムに及ぶ。まさに「この世の天国」から「この世の地獄」までをカバーする、この範囲と落差は、『天路歴程』のスケールに劣らない。

しかし「デールズ」シリーズが『天路歴程』と決定的に違うのは、クリスチャンには「世俗の町(the Town of Carnal Policy)」、「虚栄の町(the Town of Vanity)」、「疑いの城(Doubting-Castle)」などが、最終目標の「天の都」へ行く途中の通過点であるのに対し、フィンにとっては訪問するすべての学校が、経由地ではなく目的地であり、そのひとつひとつの学校をこそ（たとえ地獄に近かったとしても）天国にすることが仕事である、という点である。見捨てて次へ行くのではなく、そこにこそ取り組む。巡礼の地としての学校現場は、一過性の試練にとどまらず、継続的な課題として存在しているのだ。（それゆえ、問題のある学校ほど、何度も再訪することとなる。）

さらにフィンは、一見したところ「地獄」と思えるような教育環境の学校現場に、さまざまな形での「天国」の実現を見出す。地獄と天国の共存する学校現場は、視学官という巡礼に一種の天啓を与える場なのである。

たとえば、児童の大半が読み書きもおぼつかない、スラムの最底辺校。ところが、ある 7 歳児は驚くほどの恐竜博士で、豊富な専門知識・専門用語を披瀝した上に、哲学的なコメントまで添える。恐竜はどうして絶滅したのかな、と視学官に訊かれて、こう答えるのだ。

"Well, mister," he had said, "that's one of life's gret mysteries, in't it?" (I 46)

（「んだな、おじさん」と、その子は言ったものだ、「そらあ、生命の偉大なる謎ってやつだべさ。」）

また、貧困地区でシスターが校長を務めるカトリック系の小学校は、僧院ならぬ工場の廃墟に隣接しているが、荒廃した陰鬱な町で、そこだけはオアシス。この理想の学校像は、まさに地獄の中の天国なのだ。

The Headteacher took me on a tour of the school, fluttering along the corridors, pointing and chattering and chuckling away as we went from room to room. Children's painting and poems, posters, pictures and book jackets covered every available space. Shelves held attractive books, tables were covered in shells, models, photographs and little artifacts. Each child we passed said "Hello," brightly and in all the classrooms little busy bodies were reading, writing, discussing, solving problems and working at the computers. (I 86)

（校長は学校を案内してくれて、教室を回るあいだずっと、廊下を軽やかに歩いて、指さしたり、しゃべったり、笑ったり。児童の絵や詩、ポスター、写真、本のカバーが壁を埋め尽くす。棚にはおもしろそうな本、台は貝殻、模型、写真、小さな標本でいっぱい。会う子はみんな「こんにちは」と明るくあいさつし、どの教室でも、小さなからだで忙しく、読んだり、書いたり、話し合ったり、問題を解いたり、コンピューターで学んだりしていた。）

この町では、廃屋の窓はひとつ残らず叩き割られ、商店の窓には鉄格子、界隈はゴミだらけ。公立中学校は、まるで少年院。完全に学級崩壊し、授業がまったく成立しない。化学の実験をしようにも、ガス・バーナー、酸の入った瓶、ガラスのビーカーをこの生徒たちに持たせるなどもってのほかで、設備すらない。荒れた学校現場の克明な描写は、ディケンズ(Charles Dickens)の『ニコラス・ニクルビー』(*Nicholas Nickleby*, 1838-39)におけるスクィアーズ校長(Mr Squeers)の「ショーネンジゴク学院(Dotheboys Hall)」を連想させるほど。実際、この学校一の問題児は、ディケンズの小説の悪党に例えられ、ここが英国人の「地獄」観に合致することを裏づける。

…the most aggressive-looking adolescent I had ever seen in my life came into the library. He resembled a younger version of Magwitch, the convict in the Dickens' novel *Great Expectations* who terrifies poor Pip in the graveyard. The youth had a bullet-shaped, closely-shaven head, several large metal studs in his ear and an expression which would stop a clock. When he came closer, I saw that he was decorated with a selection of unusual tattoos. On his knuckles *LOVE* and *HAT* were spelled out in large blue letters, on his cheeks small tattooed tears descended from an eye like those on the face of a circus clown and stretching from ear to ear across the full width of his neck was a series of dots, between small tattooed scissors. In the middle just above his Adam's apple were the words *CUT HERE*. (III 192-193)

（‥‥生まれてこのかた、見たこともないくらい攻撃的な外見の青年が、図書室に入ってきた。さながらマグウィッチの若年版。ディケンズの小説『大いなる遺産』で、かわいそうなピップを墓地で怖がらせる囚人だ。この若者は弾丸型のスキンヘッドで、片耳には大きな金属鋲が並び、表情と

きたら時計も止めかねない。近くにくると見えたのは、身を飾る、普通じゃない刺青一式。両の拳骨にはLOVE（愛）、HAT（スケ）と大きな青い字、頬にはサーカスのピエロの顔よろしく、小さな涙の刺青が片目から点々と落ち、耳から耳へ首をぐるりと横切る点線の両端には、小さいハサミの刺青。点線の真ん中、ちょうど喉仏の上にはCUT HERE（キリトリセン）と彫ってあるのだった。）

しかし、この学校で宗教の授業だけは別。[1] キリストの受難を熱く語る教員に、クラス全員が別人のように真剣に聴き入り、問いかけにも一斉に声を合わせ、“sir” をつけて礼儀正しく答える。上述の過激な刺青男子も、この先生には一生徒として素直に、熱心に反応し、キリストの磔刑の場面では、刺青の涙の上に本物の涙を流すのだ。

笞打たれ、虐げられ、嘲られて、しかしその相手を憎まず愛し、その罪を負い、自分を陥れる者たちへの愛に殉じたキリストの物語を、この社会的・経済的に恵まれない境遇の生徒たちは、自分たちの心に近いものとして、全身全霊で受けとめる。キリストへの真の共感と敬虔が、この最底辺校の不良たちにあるのだ。

地獄の中にこそある、本当の天国――この学校現場での奇跡は、宗教教育の可能性、そして教育の可能性に大きな希望を持たせる事例となる。それは『天路歴程』のパターンを逸脱しているからこそ、この学校小説において新鮮な驚きと感動を与えるのである。[2]

迫真の語り、魂の授業で非行生徒たちを導く授業名人、グリフィス先生(Mr Griffith)[3] はフィンに、自分の父はウェールズの宣教師だと明かし、ロイド＝ジョージ(Lloyd-George)の名言を引く。

“The Welsh have a passion for education and the English have no particular objection to it.” (III 204)

（「ウェールズ人は教育に情熱を持ち、イングランド人は教育に特に不服はない。」）

この警句は1980年代の文脈に置くと、「イングランド人が教育に不服を言い始めた」サッチャー教育改革をあてこするものとなる。また、学力の数値化と国際競争力の向上をめざす政策に対し、そうした統計になじまない形の宗教教育・人格教育に挺身するウェールズ人の自分こそが教育の本道、という自負も読み取れるものとなる。

事実、天国と地獄がメビウスの輪のようにつながるフィンの学校小説では、天国と地獄が直線の両極に位置する『天路歴程』の図式が棚上げにされるとともに、学校と児童生徒を学力の指標で格付けするサッチャー政権の方針そのものにも疑義が呈されているのである。

2-3 導き手としての物語作者

『天路歴程』の枠に添いつつ、それと戯れ、その枠をみずからの引き立て役に利用する、という「デールズ」シリーズのスタンスは、語り手のポジションにも出ている。

『天路歴程』では語り手のバニヤンと主人公のクリスチャンは別の人物であり、しかも主人公は寓意として、ある種の抽象性を帯びている。この主人公との距離感がバニヤンの語りを、粛々として端正な、真面目なものにしていると言える。

一方「デールズ」シリーズでは、語り手と主人公は同一人物であり、一人称で話を進めるため、語り手フィンが主人公フィンを客観視する時、その距離感は、自分を笑う英国式ユーモア、すなわち自虐ギャグが可能な類のものとなる。それが読者に、より親しみやすく受け入れやすい感触

を与えるのである。

また「デールズ」シリーズの話の枠は、『天路歴程』を何重にもパロディしている。オリジナルは、主人公クリスチャンの人格が向上する、いわば元祖ビルドゥングスロマン。だが視学官フィンは、自分ではなく、視察先の相手（学校・教師・児童生徒）を向上させるのが仕事。しかも、その仕事をするはずが、特に農業関係の知識においては、逆に子どもたちに啓蒙される。そして、物語ににじむ教育政策への批判は、陶冶の対象が、主人公も読者も突き抜けて、その背後にいる政府であることを示す。作者フィンは意外な切り返しを重ねた末に、思わぬ射程距離でテクストの外へはみ出したところに表現の矢を届かせて、現実の社会問題に読者を導くのである。

フィンのこうしたアクチュアルな政治意識・連帯志向は、じつは『天路歴程』を踏まえるからこそ、より明確に顕在化するところがある。『天路歴程』は 2 部構成で、第 1 部ではクリスチャンが艱難辛苦の末に「天の都」に至り、第 2 部では妻子も信仰に目覚め、彼の後を追って「天の都」をめざす。フィンが『谷路歴程』でみずからの刻苦精励・粉骨砕身を開陳するのも、やはり自分に続く者が出てくるのを期待してのこと、と言えよう。

事実、「デールズ」シリーズ 5 巻の読後感の特徴は、その完結感のなさである。結末でフィンが仕事でも家庭でも充実感に浸る、という点でそれなりのまとまりはあるものの、この先どうなるのかが気になるディテールがたくさん積み残されたままで、正直、ちっとも終わった気がしない。第 2 シリーズ、第 3 シリーズが始まってしまい、この第 1 シリーズの物語が書き継がれることはもうない、とわかってはいても、しかしこの物語はどこかで続いている、読めないにしても作品空間では本当は話が進んでいる、そんな余韻あるいは錯覚が、強烈に残る。

じつはそうした未完の感覚こそが、フィンが読者（特に教育関係者）に託したものの大きさの表れである。教育に終わりはなく、教師の努力にも終わりはない。学校はいつまでも続き、物語はどこまでも続く。いわば「天の都」というすごろくの「あがり」を出さないことに、『天路歴程』との最大の相違点と、その最も効果的なパロディが見出される。そこに、教育小説の作者としてのフィンの、強力なメッセージがこめられているのである。

３.『闇の奥』のバリエーションとしての「デールズ」シリーズ――紀行文学と教育小説

3-1 『闇の奥』のスピンオフの系譜

もうひとつ、「デールズ」シリーズと明らかにオーバーラップする作品に、じつはコンラッドの『闇の奥』がある。一見、軽快と重厚、と正反対の印象を与えるものの、両者は紀行文学の言説と戯れている点で、強い類縁性を持っている。

イギリス文学において旅行記は、つねに重要なジャンルであった。[4]デフォー(Daniel Defoe)の『ロビンソン・クルーソー』(*Robinson Crusoe*, 1719)やスウィフト(Jonathan Swift)の『ガリバー旅行記』(*Gulliver's Travels*, 1726)は、小説という文学形態そのものの勃興の原動力となる。大英帝国の海洋発展を背景として、ヴィクトリア朝には旅行記のパターンが、文学のみならず、大衆消費文化におけるさまざまな娯楽にまで浸透する。そのように巷間に流通する奥地の言説と旅行記の伝統をパロディしてみせたのが『闇の奥』というテクストであることを渡部は論じており、グリーンも「コンラッドは冒険小説の定型を転覆した、最も偉大な元型であり、冒険に反目する刺客である」(Green 161)と、コンラッドのメタ・ジャンル性を指摘している。

『闇の奥』の流れをくむ作品が、その後、多くの作家によって生み出され、一大バリエーション、ないしスピンオフの系譜を成しているのは、原作にそれだけの起爆力と遊び心があってこそ

のこと、と言えるだろう。目につくものだけでも、Evelyn Waugh, *A Handful of Dust* (1934), Graham Greene, *The Heart of the Matter* (1948), Laurens van der Post, *Venture to the Interior* (1952), V. S. Naipaul, *An Area of Darkness* (1964), Redmond O'Hanlon, *Into the Heart of Borneo* (1984), Gavin Young, *In Search of Conrad* (1991), Sven Lindqvist, *"Exterminate All the Brutes"* (1992), Colin Thubron, *The Lost Heart of Asia* (1994), Redmond O'Hanlon, *Congo Journey* (1996), Rennie Airth, *River of Darkness* (1999)と、枚挙にいとまがない。

「デールズ」シリーズがこの系統に属していることは、最終巻の『谷の奥』(*The Heart of the Dales*)という表題にも明白であり、デールズ地方の最奥地を舞台とする「谷のてっぺん」シリーズも、この系列上にある。旅行記の定石に沿うフィンの語りは、いうなれば教育界のマーロウ(Marlow)。物語にかぶさってくる『闇の奥』のイメージは、学校現場の実態を、時にはコミカルに、時には重苦しく、いずれの場合も、よりくっきりと読者に照らし出す。

たとえばシリーズの幕開けは、いきなり探検家の比喩である。

> At long last, after a two-hour search up and down the Dale, along muddy twisting roads, across narrow stone bridges, up dirt tracks, past swirling rivers and dribbling streams, and through countless villages in an increasingly desperate search, I had eventually arrived at my destination. At the sight of the highly-polished brass plate on the door bearing the word BACKWATERSTHWAITE SCHOOL, I heaved a great sigh of relief and felt that sort of pioneering triumph which Christopher Columbus, Captain Cook and Scott of the Antarctic must have felt on arriving at their destinations after their difficult journeys. (I 1)

> （とうとう――谷を上ったり下ったりして2時間も探したあげく――ぬかるんで曲がりくねった道を行き、狭い石橋を渡り、泥道を上り、渦巻く川や、ゆるい流れを越え、数えきれないくらいの村を抜け、次第に絶望がつのっていたところで――ようやく目的地に着いた。戸に嵌められている、磨きこまれた真鍮の銘板にある「バックウォータースウェイト校」という字に特大の安堵のため息をついて、味わった開拓者の勝利感たるや、クリストファー・コロンブスやキャプテン・クックや南極のスコット隊長が苦難の旅路の果てに目指す地にたどりついた時もかくや、というものだった。）

このシーンは『闇の奥』の冒頭、暮れなずむテムズ川の河口で、マーロウがサー・フランシス・ドレイク(Sir Francis Drake)やサー・ジョン・フランクリン(Sir John Franklin)の名を挙げて、海の英雄たちの勲功を述懐する場面(47)とも響き合う。壮大な歴史のスケールと人間の偉大さに、高尚な気分になって読み進めていくと、新米のフィンが手間取りすぎたために、視察先の児童はとっくに下校した後で、そもそも校長は視学官が来ることも把握していなかった、という完全な空振りとなり、読者は思い切りずっこける。ジャンルが交差することによるインターテクストの効果で、読者はフィンの体験談を2倍楽しめるのである。

この『闇の奥』効果は、別の方向にはたらくと、フィンの目撃したものの深刻さを読者の心に2倍も強く訴える。

たとえば、学校の中の奥地としてよく出てくるのが図書室である。ヨークシャー州が農業州でもともと教育熱心でないことに加え、サッチャー政権の教育予算削減のあおりで、州内の学校図書室では図書の配備が行き届いていないことがままある。もはや教育的用途に適さない、時代の遺物と化した古書が、そのまま放置されている例も多い。読書こそが教育の根幹、と信じるフィ

ンは、学校訪問すると必ず図書室を視察するが、往々にして、そこはもはや、秘境ないし魔窟。書棚に見られる *Life in the Belgian Congo*（『ベルギー領コンゴの生活』）(I 237)、*Travels in Southern Rhodesia*（『南ローデシアの旅』）(IV 58)といった時代錯誤な書名、フィンが手に取った *Britannia's Empire*（『女神ブリタニアの帝国』）にある「ピグミーは野蛮な小さい黒人ですが、みなジョージ 5 世の忠実な臣民です」(IV 58)という植民地主義丸出しの文言は、いずれも『闇の奥』の世界を強く想起させ、その時代から知的に進んでいない学校現場の闇の深さを読者に鋭く突きつける。

フィンは「デールズ」シリーズ 5 冊のすべての巻でスラムの教育困難校を取り上げるし、虐待やネグレクトを受ける貧困児童の窮境と素行も赤裸々に描写する。こうした児童や学校に対する視学官としての暗澹たる驚愕と無力感は、『闇の奥』でマーロウが木立の中で死にゆく黒人奴隷のうごめく姿を見たときの衝撃(66-67)に劣らない。

そしてフィンが最も義憤を爆発させるのは、学校現場の奥地＝片隅で、旧弊な教授法に執着し、児童生徒を見下す、権威的な教員に対してである。子どもの可能性を伸ばす、子どもの能力を信じる、といった教育の基本理念が根本から欠けていて、独裁的な支配者と化した、こうした「賞味期限切れ」(I 67)の教師たちの姿には、「おまえはクルツ(Kurtz)か！」とツッコミたくなるものがあり、『闇の奥』の世界が思わぬ近くで展開している感覚を、読者に与えてもおかしくない。

このように『闇の奥』とのクロスオーバーは、さまざまな形で、フィンの作品世界のもつ陰影と光彩の両方を、よりはっきりと読者の眼前に映し出すのである。

3-2 ヨークシャーの学校の「隠遁」志向

「デールズ」シリーズが『闇の奥』のような奥地の言説とすんなりなじむ要因のひとつに、舞台となるヨークシャーの土地柄がある。州民は田舎であることにコンプレックスを持ったりしない。逆に、都会ぶったり、背伸びしたりすることを嫌う。昔からの地元の流儀にプライドを持ち、よそ者に惑わされない。中央を拒否し、あえて奥地であろうとする、この地域性は、外から見れば「秘すれば花」。一種の隠遁志向、門外不出の心性は、秘仏が御開帳を期待させるように、外部の人間の好奇心や知識欲を刺激して、紀行文学の格好の対象となる。

実際、シリーズの開幕早々、第 1 巻の第 1 章でさっそく「発掘」されたのは、隠れ里の名教師。前掲の引用の通り 2 時間の捜索の末、ついに発見した学校の校長とフィンの対面は、リヴィングストン博士(Dr Livingstone)とスタンリー(Henry Morton Stanley)の歴史的邂逅を思わせる。当時、骸骨のように痩せ衰えていた博士に負けず、「ひょろひょろした猫背に、青白い顔、白髪交じりの縮れっ毛はまるでボンスター。こりゃあ、電気イスからの生還者か」(I 5)という、その浮世離れた風采は、深山の仙人というより、むしろ絶境の珍種。ここで 40 年教えていて、外に出る気はさらさらない、というこの奇人が、じつは素晴らしい教育の実践者で、児童や村人の絶大な信頼を得ている。その水準の高さときたら、フィンが紹介するや、研修の講師の依頼がひきもきらず、中央省庁から政府視学官が視察に来るほど。しかし地域に根差した教育に身を捧げる校長は、よけいな名声に、むしろ迷惑顔。大物と見込んで辺境まで追うものの、たいして相手にされない、この関係は、マーロウとクルツを匂わせるところもある。

そして、ヨークシャーでは学校の建物までが、みずからを秘匿し、人目を忍び、息をひそめている。それは校長の策略か、とフィンはなかば本気で勘ぐるのである。

I had got hopelessly lost on the way to that first visit and had, in fact, passed the school

without realising it. There had been no traffic triangle warning of a school, no school board, no playground, nothing that would identify the austere building as an educational establishment. I formed the idea at the time that the window boxes, tubs of bright flowers, curtained windows and small carefully-tended garden in the front of the building were intended to disguise the fact that it was a school. Perhaps the headteacher had cleverly altered the appearance of the building to resemble a private dwelling to evade a visit from unwanted visitors, in particular anyone from the Education Department at County Hall. (V 372)

（あの最初の訪問に向かう途中、私はどうしようもなく迷ってしまい、しかも、じつはその学校の前を、そうとは気づかずに通り過ぎていたのだ。学校を示す三角の交通標識もなければ、校名の門札も、校庭もなく、この簡素な建物が教育施設だとわかるようなものは一切ないのだった。そのとき私が立てた説は、こうだ。窓辺の花棚、鮮やかな花のプランター、カーテンを引いた窓、建物の前にある、手入れの行き届いた小さな庭は、ここが学校であることを隠す偽装。おそらく校長は、巧妙に建物の外観を変えて個人の邸宅に似せ、招かれざる客の訪問を避けているのだ、とりわけ、州庁の学校教育部から来る者を。）

間違われること、見落とされることを、むしろ進んで望んでいるかのような学校の造作。これは、シリーズ中の多くの学校に共通している。探しにくい、という学校の属性は、この地では理想であり美徳なのである。[5] この風土が、フィンの職務である学校訪問を、ますます苦労の多いものにする。

しかし、やがて、この土地の感覚にフィン自身が同化していくのだ。地元の女性校長と結婚し、新婚夫婦の新居として購入した古いこじんまりしたコテージは、鄙びた野にひっそりと建つ、まさに隠れ家。仕事帰りのフィンは、その我が家に向かう。

Through the car window now, the cottage looked cheerful and welcoming, and I knew the two people I loved most in the world would be waiting for me. (V 64)

（いま車窓からは、そのコテージが快活に歓迎しているように見え、そして私にはわかった、世界で一番愛するふたりが、私を待ってくれているのだと。）

愛妻と愛息を、フィンはここに、まさしく秘蔵している。この一文にあふれる温かな幸福感、深い安らぎ。そこには心からの実感がこもる。奥地の気風に順応し、ここに根付いて破滅ではなく繁栄するフィンは、クルツの陽画ですらあるのだった。

3-3 民俗伝承の創出

「デールズ」シリーズが紀行文学のスタイルに乗りやすい理由として、フィンが外来者であることも挙げられる。フィンは、ヨークシャー出身ではあっても、デールズ地方の生まれではないため、地元民には「よそ者」扱いされている。[6]

紀行文学というジャンルは英国において、とくに帝国主義的遠征・開拓・探検の成果であり、渉猟し収集した素材を語りという形で展示する、いってみれば「話の博物館」である。したがって作者には、お宝を見極める目、仕入れの能力が必要とされる。それはつまり旅行者の目、外部

の人間の目。「よそ者」であるメリットのひとつは、物語の語り手として、素材を見る目の新鮮さを確保できる、ということなのである。

そしてフィンが「よそ者」であることのもうひとつのメリットは、カルチャー・ギャップゆえに生活者としての行動がはからずも珍妙・滑稽になりがちで、自身が物語の素材の提供者となること。すなわち、住民としての自分自身も、話の種となり、収集の対象となるのである。

新参者のフィンは次々にいろいろな誤解や愚行をやらかす。村の共同菜園を借りたはいいが、番号の振り方がここ流で独特だったため、誤って他人の区画を更地にしてしまったり。コテージの離れの小屋をネズミ対策で壊したら、じつはそれが由緒ある昔の礼拝所の跡で、毎年アメリカからシェーカー教徒が巡礼に来る、歴史的建造物の文化遺産だった、と判明したり。コテージに合うベッドをオークションで落札し苦労して運び込んだら、それが前の住人の死の床で、大時計を買ったら、それもやはり出所は同じこのコテージで、ベッドも大時計も元の場所に戻ってきただけだったり。

紀行文学には、その土地の歴史・地理・社会・文化を記録するという人類学的な意義があるが、「デールズ」シリーズはそれをコミュニティの小さな単位で実践し、村の逸話を残す民俗学的な役割を果たしている。

フィンは土地の古老の話を聞き書きし、ヨークシャー方言も含めて丸ごと、作品中に記載する。また視察先の学校では地方の伝説・民話を調べて書く授業もしており、そうした学校現場の教育実践もフィンは作中に採り入れる。そしてフィン自身の数々の失敗談は村の語り草となり、それを「フィン民話(Phinn folklore)」(IV 327)と自称する。つまり種々の形をとりながら、フィンの作品そのものが 20 世紀の民話を成し、民俗伝承を創出しているのだ。[7]

『闇の奥』ではマーロウの語りそのものが主人公であり、作家としてのコンラッドの真髄が東欧の口承文学の継承にあることを武田(2005)は論じているが、フィンの語りにも、自分の引き継ぐ地域性への愛着が色濃く漂う。加えて、自分が語る相手への意識も共通する。『闇の奥』が海の絆を共有する仲間たちに伝えることをこそ、じつは前景化している作品であるように、「デールズ」シリーズはその献辞の通り、「すべての献身的な教師たちに」(I v)伝えることを企図している。

外来者としてのフィン、外国人としてのコンラッド。ふたりの接点が語り部としてのコミュニケーションへの希求、さらには共同体への帰属願望にあることをも、教育小説と紀行文学の接近は、照らし出すのである。

４．テレビ番組としてのヨークシャー・クロニクル――マスメディアと教育小説

4-1 ヘリオットと大ヒット

「デールズ」シリーズはテレビ番組の型にも明らかに依拠しているが、この点を捉えるには、同じくヨークシャーを舞台にする連作小説の作家たちも視野に入れる必要がある。ジェイムズ・ヘリオット(James Herriot, 1916-95)の『ヘリオット先生奮戦記』(*All Creatures Great and Small*, 1972)以降の「ドクター・ヘリオット」シリーズ、ジャック・シェフィールド(Jack Sheffield, 1945-)の『先生、先生！』(*Teacher, Teacher!,* 2004)以降の「ティーチャー」シリーズは、フィンの「デールズ」シリーズとともに「ヨークシャー・クロニクル」と総称できる類同性を持つ。[8] 獣医・視学官・小学校長と、主人公の職業こそ異なるが、ヨークシャーのお国自慢の年代記、ユーモア文学・地方文学のベストセラーとして、これら 3 つのシリーズは 3 本の矢のごとく、まとまった存在感を示しており、なによりそれぞれにテレビとの縁が深い。よって「デールズ」シリーズと

テレビ番組の関係を分析するには､他の 2 シリーズとの関連や影響を検討することが有効となる。

そこでまず、フィンの先達となるヘリオットの場合を考察する。「ドクター・ヘリオット」シリーズはテレビドラマ化され、BBC1 チャンネルで 1978 年から 1990 年に放映されて、国内で絶大な人気を博するのみならず、世界的にヒットした。放送終了後 30 年経つ現在でも、シリーズ 7 までの全 89 エピソードを収録した 33 枚組 DVD ボックス・セット、「コンプリート・コレクション」(￡35.93)が販売好調で、視聴者の人気はいまだに根強い。[9]

ヘリオットが自作の舞台とし、ドラマ化に際して現地ロケが行われたデールズ地方には、世界中から観光客が押し寄せた。ヘリオットの没後も、旧・自宅兼診療所は博物館に改装されて観光名所になっている。また原作の翻訳が各国で出版され、日本でも全作品の邦訳が出ている。

作家デビュー以来「ヘリオットの再来」､「教育界のヘリオット」と称されるフィンに、ヘリオットが与えた感化のひとつは、デールズ地方をテレビの舞台として意識させたことだろう。このヘリオット作品の大ヒット以来、デールズ地方はただのド田舎ではなく、世界の視線が集まる場所に変貌したのである。

小説の形式からいえば､ヘリオットの作品はもともと､テレビドラマにしやすい特徴があった。主人公としてのヘリオットは、じつはシャーロック・ホームズと相似関係にある。ホームズが探偵として扱う事件(case) と依頼人(client)は、ヘリオットが獣医として扱う症例(case) と患畜(client)に対応している。ホームズものは初出が雑誌であり、各作が単発の短編として定期的に世に出たが、各章の独立性が高いヘリオットものの構成もまた、毎週放送・毎回完結のテレビ化にもってこいであった。この比例式に、フィンも連なるのだ。

フィンが視学官として行う学校訪問は、ヘリオットが獣医として行う往診と健康診断に相当する。フィンは学校単位の事例(case)において教員(client)を、治療ではなく指導する。教育委員会にフィンが提出する報告書は一種のカルテであり、それぞれがそのまま短編の素材にできる（そしてテレビの脚本の原型にしてもいいくらいの）個別のまとまりを備えていたと考えられる。

テーマに着目すると、ヘリオットの文学は人間愛・動物愛・自然への愛・神への愛という、きわめてヒューマン（ないしヒューマン・プラス）なテーマに貫かれ、しかもそれが温かなユーモアに包まれて提供されている。この豊かな世界観は、放映当時のサッチャー時代の殺伐とした世相に、大いなる慰めを与えるとともに、ある種の訓戒として響いたものと思われる。そして書籍のみならずテレビで発信されることで、受け手となる読者・視聴者数の規模は飛躍的に拡大し、世論を動かす力も一気に増大したはずである。

このヘリオットのアプローチと文学的・興行的成功が、サッチャー教育改革の荒波をもろにかぶったフィンに､「教育にあるべきヒューマニティ」というテーマ、そしてそれを伝える手段としてのユーモアの有効性を着想させたことは、容易に推測できる。

このように、舞台・形式・テーマの 3 つの点で、ヘリオットの連作小説と連続テレビドラマのメディアミックスは、ひとつの雛型となって後続のフィンに道を拓いているのである。

4-2 フィンとトーク番組、報道番組、バラエティ番組、ドラマ、シットコム

「デールズ」シリーズとテレビ番組の照応はドラマにとどまらず、多種のサブジャンルにわたる。そうした多方向の親和性は、フィンの多才さ・柔軟さだけでなく、教育小説とマスメディアの共通項であるエンターテインメント性にも由来している。

第 1 巻の謝辞でフィンは、作家転身の契機を次のように明かしている。

I should like to thank…Esther Rantzen who invited me on to her television show “Esther” and encouraged me to tell my stories in print. (I vi)

（感謝を‥‥エスター・ランツェンに。自分のテレビ番組『エスター』に私を招いてくれて、私の話を本にするよう激励してくれたのだ。）

フィンは視学官着任直後から、学校での見聞を語る話がおもしろい、と評判になり、「話の名手」・「笑いの詰まった樽」という触れこみで、婦人会の講演やゴルフ・クラブのディナーなど、地域の催しに引っぱりだことなる。それが有名テレビ司会者のエスター・ランツェン[10]の目にとまり、彼女のトークショーに出演する運びとなったもの。番組での彼女の勧めで、フィンは執筆に着手する。つまり「デールズ」シリーズは、テレビにうってつけどころか、もともとテレビトークだったのだ。それほどフィンの語りは、当初からマスメディアにぴったりだったのである。

州内を巡察する視学官の仕事は、地域を取材する記者の仕事とも近い。人材発掘、お宝発見のジャーナリスティックな楽しみがあることを、フィンはこう自覚している。

One of the great joys of being a school inspector is the opportunity of meeting so many interesting, unusual and sometimes truly bizarre people. (IV 143)

（視学官をやる大きな喜びのひとつは、おもしろい人、変わった人、ときには真の変人に、たくさん会う機会があることだ。）

「デールズ」シリーズには名物教師や個性派児童生徒があふれ、語り手フィンは彼らを紹介するMC ないし DJ の機能を果たしている。この学校小説は「奇人変人大集合」、「学校人間カタログ」、「視学官がやってくる」、「フィンの学校に乾杯」とでもいった企画での現場突撃ルポにも似た、訪問番組・報道番組の観を呈しているのだ。

学校現場とは娯楽の場だ、という見方をも、フィンは次のように披露する。

One of the delights of working in schools is to hear of, and on occasions witness, such humorous episodes. Children and young people have a wonderful capacity to make us laugh—sometimes consciously but more often than not, unconsciously. (V 219)

（学校で仕事をする楽しみのひとつは、すごく笑える話を聞いたり、ときには目撃したりすることだ。児童生徒がこちらを笑わせてくれる能力ときたら、すばらしい――笑わそうと思ってのこともあるが、そんなつもりもないのに、ということのほうがむしろ多いのだ。）

フィンの世界では、教員も児童生徒に負けてはいない。「私は教師ですよ、フィン先生、最後に笑うのは私ですとも」(IV 192)とほくそ笑む手練れのベテラン教師もいれば、以下の場面のように、若手のやり手もいる。

“…the French *assistante* who allegedly assaulted a sixth form student with a banana…She was using some plastic fruit as visual aids to get her class to practise their French when a boy made

some clever comment. The *assistante*, who can't have been much older than the boy himself, evidently threw this banana at him which unfortunately hit the boy smack between the eyes, knocking of his glasses, before rebounding to the teacher like a boomerang…Mademoiselle Régine caught the missile and received a standing ovation from the class." (IV 106)

（「‥‥そのフランス語指導助手が、聞くところによると、最上級生をバナナで攻撃したそうで‥‥クラスにフランス語の練習をさせるときの教材に、プラスチックの果物を使っていたら、ひとりの男子生徒が何か、こましゃくれたことを言ったそうな。この指導助手、年はその生徒とたいして変わらないはずなんだが、なんでも、そのバナナをその子に投げつけて、それがあいにく眉間に命中、めがねを叩き落としてから、はねかえって先生のところに戻ってきて、まるでブーメラン‥‥レジーヌ先生はこのミサイルを受けとめて、クラス全員総立ちの拍手喝采を浴びたとか。」）

この「バナナ・ブーメランの遣い手」、とびきり可笑しい逸話で、しかもやや不謹慎なところが、まさにバラエティ番組のノリ。学校とは、こうした笑いのステージでもあるのだ。

視学官のオフィスである教育委員会も、お役所とはいえ教育現場の延長で、爆笑・苦笑、とりどりの笑いが絶えない場として描かれる。とくにフィンの同僚のアイルランド人とウェールズ人の会話は漫才そのもので、[11] それが視察先から全員が戻ってくる夕方の退勤時、というお約束は、同じドラマでも、まさに英国人好みのシットコム（シチュエーション・コメディ）の様式。一定の頻度で出てくる「待ってました」な展開は、日本で言えば水戸黄門の印籠に近い。定番化したパターンが、フィンのストーリーに安定感と、さらなる親近感をもたらしている。

このようにトーク番組、報道番組、バラエティ番組、ドラマ、シットコムと、フィンの作品が擬するテレビ番組の類型は多岐にわたるが、これほど多角的な掛け合わせを可能にしているのは、そこに一貫している「目の前のものを受け容れて面白がる眼」、すなわち娯楽性に対する感受性と自覚的な意識である。その意味で、フィンの小説家としての目はテレビカメラの眼と通い合うのであり、そこに彼の教育小説とマスメディアの出会いがあると言えるだろう。

4-3 シェフィールドとＭＴＶ

「デールズ」シリーズ出版開始の 6 年後に第 1 作が出た、シェフィールドの「ティーチャー」シリーズは、作者自身を主人公に据え、一人称で実体験をもとに教育現場を語る、というフィンの小説手法を踏襲しつつ、特定の小学校の校長という視点からの定点観測方式にシフトチェンジしたところに新味がある。[12] テレビの感覚を学校小説に導入している点も、フィンの先例に立脚しているものと推察されるが、後発のシェフィールド作品はテクストの構成技法に、より斬新な展開を見せている。

シェフィールドの特色は、MTV とリモコンの感覚を採り入れたテクスト構築にある。それは「ティーチャー」シリーズの舞台である 1970 年代後半から 1980 年代が、テレビのコンテンツとテクノロジーに、これらの大きな変化が生じた時代であることと符合する。

MTV は 1981 年に開局したアメリカのケーブルテレビの音楽専門チャンネルで、24 時間ポピュラー音楽のビデオクリップを流し続ける番組編成。マイケル・ジャクソンやマドンナに代表されるように、プロモーション・ビデオが新曲発表と不可分の表現メディアになった時代に対応していた。同年には日本でもテレビ朝日系で音楽番組『ベストヒット USA』（司会・小林克也）がスタートし、ポップスとロックの全米ヒットチャートをビデオクリップのカウントダウンで紹介。

ミュージック・ビデオはテレビの提供する新しい娯楽形態として、以後急速に一般化していく。

テレビのリモコンは、イギリスで 1977 年に BBC の技術者の開発したモデルが普及。日本でも 1979 年にリモコン付きテレビが発売される。手元でチャンネルを切り替えられる機器は、人々の視聴行動を大きく変えていく。テレビは視聴者が「一定の時間つきあうもの」から「気まぐれに飛び移るもの」になっていくのである。

こうした MTV 番組やリモコンのスピード感に近い画面展開が、シェフィールドの作品世界である。そのプロット進行は読者に、まさにテレビをザッピングして見ている感覚を与える。場面の切り替えが早く、一場面が短い。瞬間的な場面の連続は、残像の感覚も生む。スピードの速さ、断片の集積。そこには、どこかポストモダンな感覚がよぎる。[13] アートとしての意識の高さが、このテクストのデザインには看取できる。

1 冊につき 1 年度、話の進む「ティーチャー」シリーズでは、各年度のヒット曲が BGM として登場する。村人の家のラジオで流れたり、村のコーヒーショップのジュークボックスにかかったり。すると、その場面自体が 1 編のビデオクリップに見えてくる感覚も生じる。

そのように芸術的、かつ、お洒落なアレンジで、しかし描かれる中身は、村の田舎暮らし。この型枠と素材のギャップは、ほのかな笑いを呼ぶ。と同時に、擬似的ながら、村の平凡な日々をテレビの画面に入れ、ある種の距離感を生み出すことで、現実を普遍にモード変換する効果も出している。

なにしろシェフィールドが舞台とする架空の村、ラグリー・オン・ザ・フォーレスト(Ragley-on-the-Forest)は象徴としてのトポスであり、そこに繰り広げられる出来事は 1970 年代・80 年代の寓話なのだ。物語には十分なリアリティがあり、登場人物にも十分な存在感はあるものの、テクスト全体が塗絵の下絵にも似た不思議な透明感をたたえているのは、それが読者の体験を代入したり重ねたりすることの可能な場として存在しているからである。

1979 年にソニーが発売したウォークマンは瞬く間に世界に広まったが、これはまさに人々の生活に BGM を付与する機器であり、日常をビデオクリップ化する感覚をもたらすメディアだった。それはいわば、国民の思い出にサウンドトラックが付いた時代であった。その感覚を、シェフィールドのきわめて音楽コンシャスなテクストは利用する。登場する曲は、読者それぞれの個人的な回顧を誘い、その多数の回想の核となり、時代の共通軸として機能する。これに付随して、各年度に話題となったテレビドラマ、映画、スポーツ選手、ヒット商品、ベストセラー、時事問題なども、当時の世相を示す要素として各巻で列挙され、読者の記憶を刺激する。

つまり、作家としてのシェフィールドに顕著なのは、風俗小説としての意識である。そこには「教育は時代の流れと共にある」、「教育は時代の風景の中にある」という、教育者としての強い主張をも、見て取ることができる。

マスメディアとの関係に、フィンとはまた異なる、新たな進展を見せるシェフィールドの学校小説は、ヨークシャー・クロニクル全体にいっそうの立体感と奥行きを加えている。それは逆に、「デールズ」シリーズがひとつの土台としても発展性を蔵していたことの証でもあるのだった。

５．結

「デールズ」シリーズにおけるジャンルの交差は、教育小説に足場を置きつつも読者を多様な仮想体験にいざなう。道徳物語の面影は、教室や教会に身を置く効果、天国や地獄の気分、かしこまる感じを起こさせる。紀行文学の輪郭は、アウトドアに出かける効果、桃源郷や処女地や奥

地の気分、わくわく感を呼ぶ。テレビ番組の気配は、自宅にいる効果、お茶の間気分、くつろぎ感をもたらす。そしてこれらの題目(subject)が交代で現れるテクストとは、複数の科目(subject)が交代で配される、学校の時間割の感覚をこそ実演しているものにほかならない。この機構は、意識上にもサブリミナルにも働きかけて、読者を学校時代の童心に返すのだ。

教室や教会で学んだ教科書や本、家庭で見慣れたテレビ――そうした科目や徳目、教材やメディアの持つ「物語の力」を利用することによってフィンは、元・学童、現・視聴者である読者に、「教育の力」を強くアピールする。つまりフィンの小説空間とは教育空間であって、小説がそのまま教室なのである。

フィンが読者の実感を高める仕組みとしてこの形をとっていることには、ふたつの背景がある。

ひとつは、イギリスの教育現場における教育実践の伝統、すなわち、体験による学びを重視する、イギリス経験主義の歴史である。たとえば自然観察散歩(nature walk)や野外授業(outdoor class)は、子どもたちに生きた学びを提供する教科横断的な総合的教育活動であり、学校小説においても重要なモチーフとして登場する。[14]

もうひとつは、視学官の報告書における事例の意義である。「デールズ」シリーズでは、フィンも同僚たちも、視察先の学校の状況報告に具体例を豊富に挙げる。それを成果主義の上司は冗長として軽視し、逆に、その後任で元・政府高官の上司は、逸話こそが説得力を持つとして高く評価する。それはエピソードが教育においてプロセスと動態を把握することの重要性に直結しているからであり、教育効果や人格形成はロング・スパンでこそ真価が見えてくる、という認識にも基づいているだろう。

このふたつの背景のどちらにも、サッチャーの教育改革は逆行する。学力として数値化できないものを切り捨てる評価基準は、体で学ぶことの意義を否定し、頭で学ぶことのみを偏重する。また試験の結果のみによる学校や児童生徒の序列化は、背後にある複雑な社会的・家庭的事情にも、早熟／晩成といった個性にも配慮せず、ごく短期的で表面的な一部分しか見ていない。

フィンが打ち出す「物語の力」とは、まさにこのサッチャーの政策に対する批判であり、彼の学校小説は、教育における物語の力を読者に体で学ばせ思い出させる、小説の学校なのである。

児童生徒としての感情と記憶を呼び覚まされる読者は、傍観者としてではなく当事者として、テクストに参入し共感する。その擬似体験は、テクストの外の現実における教育課題への、読者の理解と協力をも促す。それが教育行政に対するアンガージュマン、すなわち政治的態度表明と社会的参加につながる――こうしたシナリオが、フィンの意匠には読み取れる。

教育と娯楽のジャンルを次々と模するフィンの技法は、その小説に美学的、実践的、さらには政治的なインパクトを持たせる。それは、文学者である以上に教育者でもある彼ならではの機略だったのだ。

注

1. 政教分離の日本と違い、政教一致の英国では国の宗教が英国国教会であるため、公立学校では、校名に正式には “Church of England” の字句が入り、学校評議員のメンバーにも教区牧師が加わり、授業などで英国国教会の宗教教育が行われる。
2. 工場町のスラムの宗教教育の実態といえば、エンゲルス(Friedrich Engels)が『イギリスにおける労働者階級の状態』(*The Condition of the Working Class in England*, 1845)で告発した、使徒のことを「そいつら、らい病だろ！」(Engels 141)と吐き捨てるような、無知・無理解・無関心な子ども像が一般的・伝統的な通念といえる。
3. Griffith はウェールズ系の姓(Reaney and Wilson 206)で、ウェールズ人の代表としての寓意も見て取れる。

4. ヒュームとヤングズは、ジャンルとしての旅行記の元型が巡礼物語にあると指摘し、バニヤン、チョーサーにまでその源流を遡っている(Hulme and Youngs 2)。
5. 表札を出さない外観と「一見さんお断り」システムは、ロンドンの紳士クラブにも通じ、フリーメイソン流の秘密結社的な閉鎖性を思わせる。
6. この地における「よそ者」(off-comed-un)の意味については、武田(2019a)を参照のこと。
7. ミッチェル(Mitchell)は 20 世紀前半のデールズ地方の生活誌を農牧業中心にまとめ、またウォーカー(Walker)はデールズ地方の伝説・民話を村単位で編纂しているが、フィンの作品は 20 世紀後半の教育史という観点から、これらのデールズ地方の民族誌を補完し発展させるものとなっている。
8. イギリス文学の伝統におけるヨークシャー・クロニクルの位置については、武田(2018)を参照のこと。
9. 2019 年 1 月 12 日現在で、Amazon UK でのレビュー数が 481 にのぼり、同じ価格帯(£31.65)の *Harry Potter* 映画 8 本 DVD ボックス・セットのレビュー数 610 に迫る勢いである。
10. エスター・ランツェンは 1973 年から 1994 年まで BBC1 で消費者保護をテーマとする番組 *That's Life* の制作と司会を務めた。トーク番組 *Esther* は 1995 年から 2002 年まで BBC2 で放映された。ジャーナリストとして児童虐待や麻薬の問題にも取り組み、子ども電話相談サービス ChildLine を 1986 年に創設するなど、報道と社会貢献活動の功績により、OBE、CBE、DBE を受勲している。
11. 視学官仲間の漫才が持つ政治的な意味合いについては、武田(2020)を参照のこと。
12. 両シリーズ間のインターテクスチュアリティの詳細については、武田(2018)を参照のこと。
13. この表現方法のルーツには、1985 年の出版当時「MTV 文体」と命名されたブレット・イーストン・エリス(Bret Easton Ellis)の『レス・ザン・ゼロ』(*Less than Zero*)がある。
14. 自然観察散歩は田園学校小説の古典、ミス・リード(Miss Read)の『村の学校の 40 人』(*Tales from a Village School,* 1994)冒頭の短編"The Lucky Hole"(1-5)に、また野外授業はシェフィールドのシリーズ第 8 作『聖夜』(*Silent Night*, 2013)第 17 章の中(297-298)に、その典型的な例が見られる。

参照文献

Airth, Rennie. *River of Darkness*. London: Penguin Books, 1999.

Bunyan, John. *The Pilgrim's Progress*. 1678, 1684; London: Penguin Books, 2008.

Conrad, Joseph. "Heart of Darkness", *Youth: A Narrative; and Two Other Stories*, in *The Works of Joseph Conrad,* the Collected Edition, vol. 7. London and Toronto: J. M. Dent and Sons Ltd., 1961.

Dickens, Charles. *The Life and Adventures of Nicholas Nickleby*. 1838-39; Oxford: Oxford University Press, 1950.

Ellis, Bret Easton. *Less than Zero*. 1985; London: Picador, 2010.

Engels, Friedrich. *The Condition of the Working Class in England*. 1845; London: Penguin Books, 2009.

Green, Martin. *Seven Types of Adventure Tale: An Etiology of a Major Genre*. University Park: The Pennsylvania State University Press, 1991.

Greene, Graham. *The Heart of the Matter*. 1948; London: Penguin Books, 1971.

Herriot, James. *All Creatures Great and Small*. 1970, 1972, 1973; London: Pan Books, 2013.

---. *All Things Bright and Beautiful*. 1973, 1974; London: Pan Books, 2013.

---. *All Things Wise and Wonderful*. 1976, 1977; London: Pan Books, 2013.

---. *The Lord God Made Them All*. 1981; London: Pan Books, 2013.

---. *Every Living Thing*. 1992; London: Pan Books, 2013.
---. *All Creatures Great and Small*. Perf. Christopher Timothy, Robert Hardy and Peter Davidson. 1978-1990. DVD. Universal Pictures U.K., 2013.
Hulme, Peter and Tim Youngs. "Introduction." *The Cambridge Companion of Travel Writing*. Ed. Peter Hulme and Tim Youngs. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.
Jameson, Fredric. *Signatures of the Visible*. New York: Routledge, 1990.
Lindqvist, Sven. *"Exterminate All the Brutes."* Trans. Joan Tate. 1992; New York: The New Press, 1996.
Miss Read. *Tales from a Village School*. London: Michael Joseph, 1994.
Mitchell, W. R. *Yorkshire Dalesfolk*. Lancaster: Dalesman Books, 1981.
Naipaul, V. N. *An Area of Darkness.* 1964; London: Picador, 1995.
O'Hanlon, Redmond. *Into the Heart of Borneo: An Account of a Journey Made in 1983 to the Mountains of Batu Tiban with James Fenton*. 1984; London: Picador, 1994.
---. *Congo Journey.* 1996; London: Penguin Books, 1997.
Phinn, Gervase. *The Other Side of the Dale*. London: Michael Joseph, 1998; London: Penguin Books, 2010.
---. *Over Hill and Dale*. London: Michael Joseph, 2000; London: Penguin Books, 2010.
---. *Head Over Heels in the Dales*. London: Michael Joseph, 2002; London: Penguin Books, 2010.
---. *Up and Down in the Dales*. London: Michael Joseph, 2004; London: Penguin Books, 2010.
---. *The Heart of the Dales*. London: Michael Joseph, 2007; London: Penguin Books, 2010.
---. *Road to the Dales: The Story of a Yorkshire Lad*. London: Michael Joseph, 2010; London: Penguin Books, 2011.
---. *Out of the Woods But Not Over the Hill*. London: Hodder & Stoughton, 2010.
---. *The Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2011.
---. *Trouble at the Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2012.
---. *The School Inspector Calls!* London: Hodder & Stoughton, 2013.
---. *A Lesson in Love*. London: Hodder & Stoughton, 2015.
---. *Secrets at the Little Village School*. London: Hodder & Stoughton, 2016.
---. *The School at the Top of the Dale*. London: Hodder & Stoughton, 2018.
Reaney, P. H. and R. M. Wilson. *A Dictionary of English Surnames*. Oxford: Oxford University Press, 1997.
Sheffield, Jack. *Teacher, Teacher!: The Alternative School Logbook 1977-78.* London: Central Publishing Services, 2004; London: Corgi, 2007.
---. *Mister Teacher: The Alternative School Logbook 1978-79*. London: Corgi, 2008.
---. *Dear Teacher: The Alternative School Logbook 1979-80*. London: Bantam, 2009.
---. *Village Teacher: The Alternative School Logbook 1980-81*. London: Bantam, 2010.
---. *Please Sir!: The Alternative School Logbook 1981-82.* London: Bantam, 2011.
---. *Educating Jack: The Alternative School Logbook 1982-83*. London: Bantam, 2012.
---. *School's Out!: The Alternative School Logbook 1983-84.* London: Bantam, 2013.
---. *Silent Night: The Alternative School Logbook 1984-85*. London: Bantam, 2013.

---. *Star Teacher: The Alternative School Logbook 1985-86*. London: Bantam, 2015.
---. *Happiest Days: The Alternative School Logbook 1986-87*. London: Corgi, 2017.
---. *Starting Over: A Ragley Story 1952-53*. London: Bantam, 2018.
Thubron, Colin. *The Lost Heart of Asia*. 1994; London: Penguin Books, 1995.
van der Post, Laurens. *Venture to the Interior*. 1952; London: Penguin Books, 1964.
Walker, Peter N. *Folk Stories from the Yorkshire Dales*. London: Robert Hale, 1991.
Waugh, Evelyn. *A Handful of Dust.* 1934; London: Penguin Books, 2000.
Young, Gavin. *In Search of Conrad*. 1991; London: Penguin Books, 1992.

エンゲルス、フリードリヒ。『イギリスにおける労働者階級の状態（上）』。浜林正夫・訳。東京：新日本出版社、2000。
ジェイムソン、フレドリック。『目に見えるものの署名　ジェイムソン映画論』。椎名美智・武田ちあき・末廣幹・訳。東京：法政大学出版局、2015。
武田ちあき。『世界の作家　コンラッド――人と文学』。東京：勉誠出版、2005。
---。「サッチャーのお化け――ヨークシャー学校小説シリーズによみがえる英国の幻」。『憑依する英語圏テクスト――亡霊・血・まぼろし』第 8 章。福田敬子・上野直子・松井優子・編。東京：音羽書房鶴見書店、2018。183-204。
---。「イギリス教育小説に見るヨークシャー方言の役割――文学的・政治的アプローチによる考察――」。『埼玉大学国語教育論叢』第 22 号、2019a。1-14。
---。「イギリス教育小説における学校掃除婦の表象――その文化的意味と政治的機能――」。『埼玉大学紀要（教育学部）人文・社会科学』第 68 巻、第 1 号、2019b。271-284。
---。「ジャーベイズ・フィンの学校小説における教職観――その社会的・時代的・地域的な意味――」。『埼玉大学紀要（教育学部）人文・社会科学』第 68 巻、第 2 号、2019c。367-388。
---。「連合（ユニオン）／分離（ディスユニオン）の寓話としてのヨークシャー学校小説――地域間のポリティクスとパワーバランスの展開――」。『埼玉大学紀要（教育学部）人文・社会科学』第 69 巻、第 1 号、2020。233-259。
ディケンズ、チャールズ。『ニコラス・ニクルビー』、上・下。田辺洋子・訳。東京：こびあん書房、2001。
バニヤン、ジョン。『天路歴程 天の都を目ざして』。ハンディ版。メアリー・ゴドルフィン・再話。『天路歴程』翻訳委員会・訳。東京：キリスト新聞社、2015。
ヘリオット、ジェームズ。『ヘリオット先生奮戦記』上・下巻。大橋吉之輔・訳。ハヤカワ文庫。東京：早川書房、1981。
---。『ヘリオット先生の動物家族』。中川志郎・訳。ちくま文庫。東京：筑摩書房、1989。
---。『Dr. ヘリオットのおかしな体験』。池澤夏樹・訳。集英社文庫。東京：集英社、1981。
---。『ドクター・ヘリオットの毎日が奇跡』、上・下。大熊榮・訳。集英社文庫。東京：集英社、2004。
---。『ドクター・ヘリオットの生きものたちよ』。大熊榮・訳。東京：集英社、1993。
ミス・リード。『村の学校の 40 人――ミス・リード小品集』。中村妙子・訳。東京・日向房、2003。
「ランツェン、エスター（・ルイーズ）」。『岩波＝ケンブリッジ世界人名辞典』。デイヴィッド・クリスタル・編。金子雄司、富山太佳夫、他・訳。東京：岩波書店、1997。

渡部ちあき。「「闇の奥」の外――コンラッドと大衆消費文化――」。『白鴎大学論集』第 10 巻、第 1 号、1995。285 - 303。

"All Creatures Great and Small Complete Collection." *Amazon UK*. Amazon UK. 12 Jan. 2019 <https://www.amazon.co.uk/ref=nav_logo>.

「ベスト・ヒット USA」。*Wikipedia*. Wikipedia Foundation, Inc. 17 Jan. 2019 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>。

"*Esther*." *Wikipedia*. Wikipedia Foundation, Inc. 12 Jan. 2019 <https://en.wikipedia.org/wiki/Esther_(TV_series)>.

"Esther Rantzen." *Wikipedia*. Wikipedia Foundation, Inc. 12 Jan. 2019 <https://en.wikipedia.org/wiki/Esther_Rantzen>.

"Harry Potter Complete 8-Film Collection." *Amazon UK*. Amazon UK. 12 Jan. 2019 <https://www.amazon.co.uk/ref=nav_logo>.

「家電の昭和史　テレビ」。一般社団法人　家庭電器文化会。17 Jan. 2019 <http://www.kdb.or.jp/syouwasiterebi.html>。

"MTV." *Wikipedia*. Wikipedia Foundation, Inc. 17 Jan. 2019 <https://ja.wikipedia.org/wiki/MTV>.

"Remote control." *Wikipedia*. Wikipedia Foundation, Inc. 17 Jan. 2019 <https://en.wikipedia.org/wiki/Remote_control>.

「ウォークマン」。*Wikipedia*. Wikipedia Foundation, Inc. 17 Jan. 2019 <https://ja.wikipedia.org/wiki/>.

"World of James Herriot." The World of James Herriot. 13 Jan. 2019 <https://worldofjamesherriot.com/>.

（2020年3月31日提出）
（2020年4月10日受理）

Crossover of Genres in Yorkshire School Novels: Styles of Education and Entertainment

TAKEDA, Chiaki
Faculty of Education, Saitama University

Abstract

This paper focuses on the formalistic features of Yorkshire school novels, particularly the *Dales* series by Gervase Phinn, and investigates how and why various genres in education and entertainment are incorporated into his school saga. Analysis of its narrative styles and plot patterns shows that this intrinsically non-fictional story is deliberately arranged with the frameworks of moral tales, travel writing, and TV shows. This mixture of formats, or crossover of genres, produces the effect of switching from one to another of the three spheres: a classroom/church, the open air, and the home; the reader is invited to heaven/hell, utopia, and one's living room, and feels pious, excited, and relaxed alternatively. The variety of joy which the reader is led to as in a varied school timetable arouses in him/her the sentiments and memories of a schoolboy/schoolgirl. Not as a looker-on but more as a participant, the reader is caught and absorbed in Phinn's fiction and experiences the incidents as his/her own. This sense of commitment and sympathy is not only for fun in entertainment but also for understanding and cooperation in education needed in the real world. Phinn's tactics, both aesthetic and practical (or even political), well serve him—an author and educator in equal measure.

Keywords: school novel, genre, moral tale, travel writing, TV show